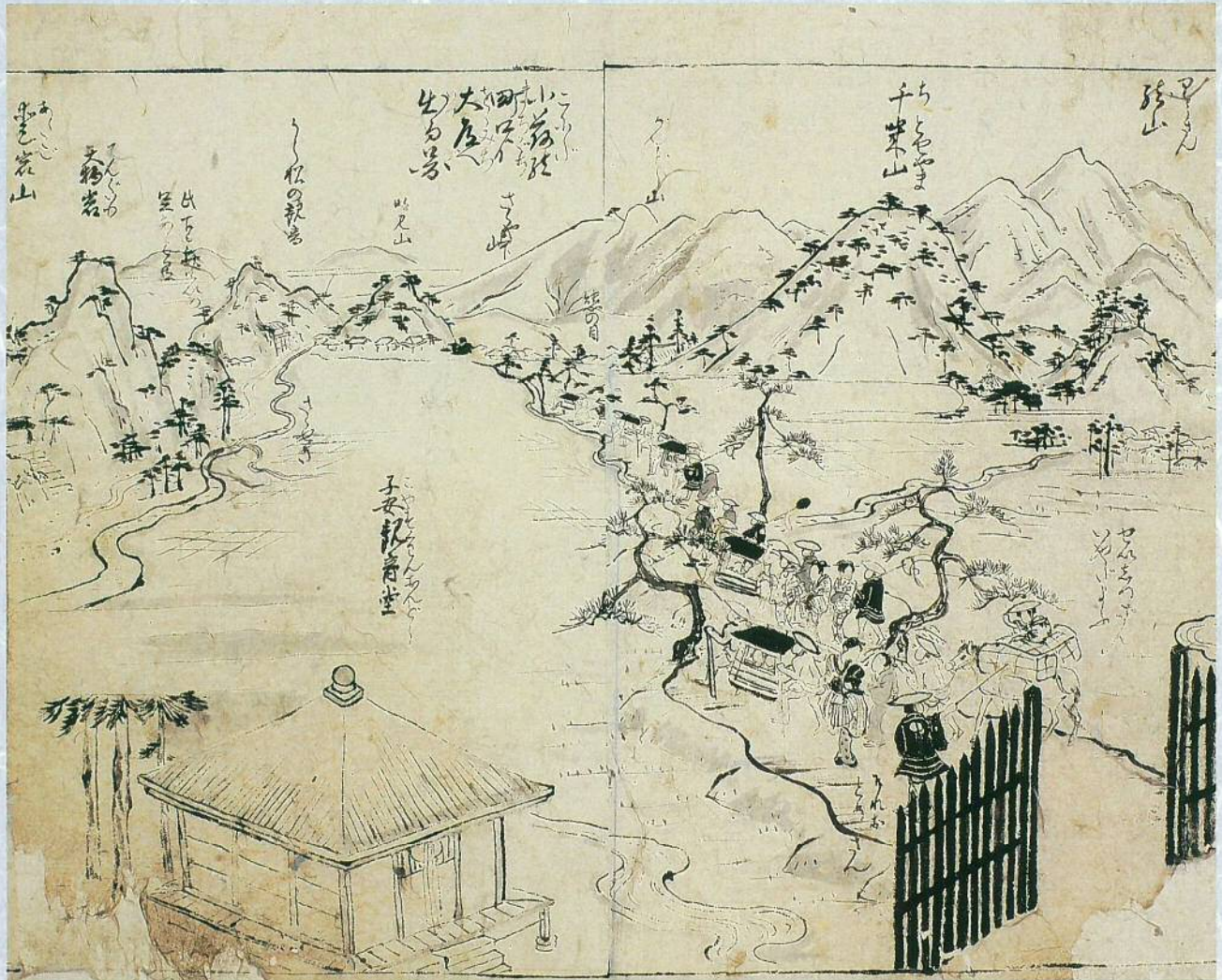


歴史館だより

題字 最上家第47代当主 最上公義氏



特別展「江戸時代の山形」～歴代の城主たち～より「御国替絵巻」(山形城下小荷町口部分)山田音羽子筆

- ◆ 国宝「伴大納言絵巻」の変遷について — 最上家の臣・武久庄兵衛が所持していた —
- ◆ 新出史料・山形殿(最上義光)宛の伊達政宗書状について
- ◆ 歴史随想「古戦場めぐりに参加して」
- ◆ 短歌「義姫は平和の女神」

No.12

2005年3月発行

最上義光歴史館

国宝「伴大納言絵巻」の変遷について

— 最上家の臣・武久庄兵衛が所持していた —



小野末三

現在、国宝に指定されている「伴大納言絵巻」(以下、「絵巻」と呼ぶ)は、我が国の絵巻物を代表する傑作の一つである。内容はそこに書かれている「絵詞」を通して知ることができるが、伴大納言善男の陰謀による放火事件により、内裡とその周辺が混乱状態に陥っている様子を描いた、十二世紀後半に創作された説話絵巻である。

ここでは、これを美術的に解明するのではなく(尤も小野自身が学問的には全く無縁ではあるが)、これが何時しか最上家(義光か)の手に渡り、元和八年(1622)山形藩最上家の消滅以後に、若狭の小浜藩酒井家に再仕官した武久庄兵衛昌勝の手により最上家より、賜った「絵巻」を子孫に伝えていった事実を追ってきたい。

まずこの「絵巻」が十五世紀中頃に、

「彦火々出見尊絵巻」や「吉備大臣入唐絵巻」という名品と共に、松永庄(小浜市の内)の新八幡宮に収められていたことが、後崇光院(伏見宮貞成親王)の当時の日誌に書かれている。それが何時しか三巻とも流出し、「絵巻」がはつきりと武久氏所有のものだと確認できたのは、天明・寛政年間以後のことである。

武久庄兵衛は近江の出である。父は佐々木六角氏に仕えていた。六角氏が織田信長との抗争に破れ没落、父の討死の後に羽州の由緒ある者を頼り、やがて最上義光に五百石で仕えた。義光の間近かに仕えていたことが、数々の記録に残されている。特に家親の代の大坂の陣では、「権現様大坂御陣之節、為使者大坂工罷登」とあり、戦後にその功として、五百石を増加されている。武久家に伝えられている、大坂の陣の折の庄兵衛使用の指物に、血で黒く染まった箇所があるというから、山形藩の実戦への参加を裏付ける、有力な証拠にもなる。

庄兵衛は時の幕閣の一員である酒

井忠勝に仕え、小浜の老役として千石を給された。個人的にも忠勝の孫娘を養女に貰い受けるなどして、承応三年(1654)十二月、八三歳で没するまで、藩政に関与する立場にあった。

この「絵巻」が何時の頃に若狭を離れ、最上家に入ったのかは確かなことは判っていない。ただ酒井家の関係者が著した『若むらさき』という随筆に、「絵巻物者賜於最上家焉」と、庄兵衛が最上家より賜ったことを示す、貴重な記録を書き残している。

この随筆は、文化六年(1809)に大田南畝(蜀山人)が編んだ『三十幅(みそのや)』の中に収められている。著者は酒井家で学問方の人物と思われる「津田かみはや」という人物である。藩主忠貫代の寛政十年(1798)に書かれ、次のような書きだしで始まっている。

「我國の守の従者、武久昌扶なるもの、家に、伴の善男の応天門を焼たりし絵巻物を、年久しく秘め置しに、いかなる風の便にか、天のすめらみことのきこし召して、

久我の前内大臣殿の妹君は、頼み奉りし殿の北の方にてわたらせ給ふゆかりあれば、頃は寛政の初めつかた内大臣殿して、召し出し給ふ、……」

紙面の都合で全文は掲載できないが、天明八年(1788)の京の大火により内裏が焼失した。その際に、平安の昔の古制復活に、「絵巻」が内裡の造営の参考にと、武久氏に久しく秘め置かれた「絵巻」が召し出されたのである。津田はその時の公家と酒井家との「絵巻」を巡っての経緯を、多方面の資料を駆使して書き上げている。要は「絵巻」が武久氏の所有物であったことを述べていることである。

明暦二年(1656)に、將軍家綱が酒井邸に赴いた際に、書院の飾り付けの品々の中に「絵巻」が置かれていた。従来、諸書の多くは、「絵巻」は藩祖忠勝が手に入れたものというが、それを裏付ける確かな記録は確認できていない。この時の「絵巻」が果たして酒井家のものであったかは疑わしい。酒井家内で「絵巻」の所在が確認され出したのは、天明・寛政年間に於ける武久氏の記録からである。明暦の「絵巻」は將軍に供覧するために、武久氏から一時的に借り受けたものと考えられる。津田は、主家や武久氏などの資料から、「絵巻」の移り変わりを、精力的に

説き明かした。その「絵巻」は最上家に於いて貰ったという一言が、部外者ではなく、酒井家関係者の口から発せられたことに、大きな意味がある。

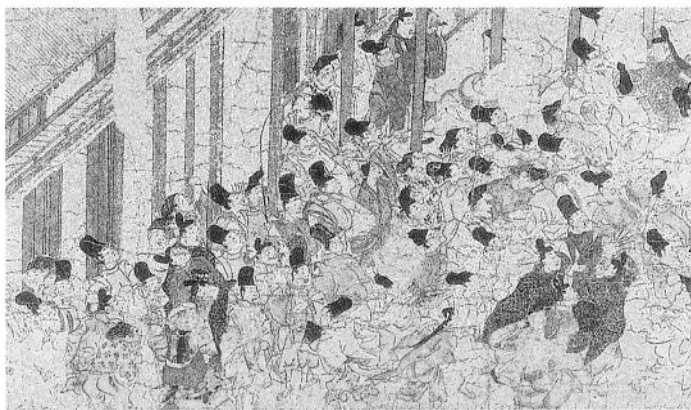
安永三年(1774)に六代目の内蔵助昌扶が書き上げの由緒書には、初代庄兵衛と「絵巻」との関わりについての記述は見当たらない。内蔵助は何故にその事実を記載しなかったのか。あくまで秘事として明らかにしたくなかったのか。しかし、結局は表に出さざるを得なかったのである。

文化八年(1811)に七代目庄兵衛昌生は、

「寛政九丁巳年正月七日、於評定所被仰出者、先年差上置候所持之伴大納言絵巻物、御用相濟御下ケ被遊候、右者此度禁裡御用二相立殊二被備天覽候処、叡感不斜、」と書き伝えている。全文は長くなるので省略するが、寛政九年(1797)正月に、先の年に京へ差し出していた「絵巻」が内裡の完成により役目を果たし、戻されてきた事を伝えている。また、「絵巻」は天覽に浴して大変喜ばれ、褒美として小袖老枚・銀子十枚と、久我大納言家の口上書などが添えられていたことも記されている。

主家の関連資料の内から、藩主忠寛の「忠寛様御年譜」には、

「十月(天明八年)久我様ヨリ京都御屋敷迄、以御使者御家来武久庄



国宝「伴大納言絵巻(上巻部分)」出光美術館蔵

兵衛所蔵之伴大納言焼応天門候絵巻物□□関白様被□□御覽度二付被成被供用度而被仰出、……」として、その年の正月の京の大火から時を経ずして、「絵巻」が京の話題となってきたことが判る。そして、寛政九年(1797)正月七日に、武久氏に戻された「絵巻」を見るため、同輩の山岸惟重が訪れた。四日後の十二日付の惟重日記には、

「武久殿二而伴大納言絵巻拜見、右者拾ヶ年以前造内裡御用之由二而、久我様ヨリ御願二而御提出被成、……」

とあり、惟重もその内部事情について

ては、承知していたのであろう。ところが、この「絵巻」にとんでもない異変が生じたのである。それは天覽に浴した名品を、藩主は黙っている筈もなく、以後、城からは出さず、たとへ勅命・台命あるとも応ぜず、永の預かりとして酒井家の所有とするという、非常な結末を迎えたのである。

「伴大納言絵巻物入

右武久内蔵丞方より、老衆工預ケ被置候由、寛政九丁巳年七月朔日御宝蔵工入置候様、御談にて小原操方より請取(「御讓道具入日記」)

とあるように、半年後の七月には強制的に取り上げられ、藩の宝庫に収められ、そのまま、維新を迎え現在に至ったのである。武久氏にとっては、悲しき結末を迎えたということである。そして、いかなる事情か知らぬが、酒井家から離れ出光美術館に移ったのは、昭和五十年代のことである。参考のために、古書から武久氏所持の記事を拾ってみる。

「類聚目録」 伴大納言絵、小浜酒井家家人武久某蔵

「古画目録」 伴大納言絵三巻、若狭国小浜家中武久庄兵衛蔵、

「画図品類」 伴大納言草紙、若狭

小浜武久平蔵書伝、

最後に一言述べてみたい。この「絵巻」の変遷について、昭和二十三年に、

ある郷土雑誌に取り上げられたのは、郷土史家の伊藤芳夫氏である。当時のこととして大した資料も手にすることも出来なかったであろう。核心に迫る程のものは見られなかったが、それでもこの調査に先鞭をつけて下さったことには間違いなく、半世紀を経て氏の願いに応えられたことは、嬉しい限りである。ここに感謝の念を表す次第である。

小野末三 (おの・すえぞう)

一九二八年 旧台湾台南州に生まれる
終戦後北村山郡榑岡町に移る
以後独学にて高校教員免許を取得
社会科教員など複数の職を経て現在
は最上家関連の調査研究の日々
を過ごす

【論文】

- 「大山筑前守光因の再考―最上義光の六男大山光隆との混同説を正す―」
- 「山形県地域史研究」二二号、一九九七年
- 「榑岡甲斐守と熊本藩士榑岡氏について」
- 「山形県地域史研究」二五号、二〇〇〇年
- 「関東に於ける最上義光の動向について」
- 「山形県地域史研究」二六号・二七号、二〇〇一・二〇〇二年
- 「山形藩主時代の最上家親について」
- 「山形県地域史研究」二八号・二九号、二〇〇三・二〇〇四年
- 「山形藩主・最上家親の最期を正す―ある一学僧の日記を検証して―」
- 「歴史館だより」一一号
- 「羽州最上家旧臣達の系譜―再仕官への道―」(最上義光歴史館、一九九八年)

【新出史料】

山形殿(最上義光)宛の伊達政宗書状について

郷土史研究家

武田喜八郎

一、はじめに

一昨年(十一月二十六日)東北大学教授の入間田宣夫先生から、最近、兵庫県立歴史博物館から、最も若い時代の伊達政宗書状(山形殿宛)が発見されたことを知らされた。

そこで早速、最上義光歴史館と連絡を取り、右の政宗書状を、入間田先生と共に、出張・調査されて来た仙台市史編さん室から、同館宛に写真のコピーを送って頂いたので、それによって全文を解読したところ、意外な事実が記載されていることに驚嘆したのであった。(図版参照)

その一つは、「今度於_二其元_一、白鳥并_二氏家方生害之由、云々」とあることである。その二は、「小斎之地_二令_一連馬_一候砌_二も、数度被_レ及_二合力_一候_一、于_レ今_一わすれかたく存斗_二候_一、」とあり、その三は、「未拙子代_二ハ無_一之候間、乍_レ存令_二延引_一候_一、」などである。

以上の如く、その内容の重大な記事

(白鳥并_二氏家方生害)に接し、大いにびっくりいたし、これは、近來にない、最上義光研究の一級史料であることを感じたのであった。



二、政宗書状の内容について

次に、同書状の解読文(五頁の下段)を掲げて、内容に触れていきたい。

この政宗書状の初めに、「白鳥并_二氏家方生害之由」とあることは、天正十二年(一五八四)六月七日に、谷地の白鳥十郎長久が、山形城内で謀殺されたことを指していると思われる。また、「并_二氏家方生害之由」とあることは、白鳥方の防戦によって、氏家尾張守の一族が、戦死したことを物語っている。白鳥十郎長久が、山形城内で謀殺されたことは、『最上義光物語』にも記し

ているから、明らかな事実であった。その年月日は、『山形の歴史』上巻(川崎浩良著)に、「天正十二年六月七日」と記している。

この事件は、直ぐに義光から政宗へ報告されたようであり、それを受けて政宗は、右の六月十二日の書状で、「内々御心もとなく存候て、使いに鉄砲成共指添、云々」と、援兵をさし向けようとしていたことがわかる。また、「小斎伊具郡内」の地に、連馬せしめ候砌にも、数度合力に及ばれ「ました事は、」今に忘れがたく存じております」と、頗る好意ある内容であり、更に「未だ拙子代(家督相続)にはこれなく候間、」最上への加勢については、「存じ乍ら延引せしめ候」と書き、今後の加勢については、「御隔意無く承わるべく候」と、甚だ好意を示した手紙である。

右の政宗書状の時代には、政宗は、確かに家督を継いでいなかった。彼が家督を相続するのは、四ヶ月後の同十二年の十月からである。この時、父輝

三、最後に

最上義光が、最上・村山地方の領国形成と、軍事・経済・民政の統一をはかるためには、通らねばならなかったのが、義光より先に織田信長から「最上の主」と認められた、白鳥長久の討伐であったと思われる。

即ち、虎(信長)の威を借りて、「最上の主」の権威行使した白鳥は、義光にとつては邪魔な存在であった。そこで、信長の没後に、天正十二年六月七日、山形城内で謀殺せざるを得なかったのである。義光の大義名分は、「最上の主」は自分であり、「二人の主はいらない」ことであったと思われる。弱肉強食の戦国時代に生まれたばかりに、白鳥長久は、不幸な武将の一人といわざるを得ない。

最後に、この新出史料の掲載を、快よくご許可された兵庫県立歴史博物館に、また、御教示と御手数を煩わした東北大学教授入間田宣夫先生初め、仙台市史編さん室へ、共に深く感謝の意して、筆を擱きます。

(二月一日記)



姫路市・兵庫県立歴史博物館所蔵（喜田文庫）

解読文

（返り点、及び句読点は、小子が付した）

態以^ニ使者ヲ申述候、仍今度於^ニ其元^ニ、

白鳥并^ニ氏家方生害之由、内々

御心もとなく存候て、更^{（使）}鉄砲成共指添、

可^レ進存候処^ニ、無^ニ菟角^一、とり静^{（しずめ）}られ候由

承候条、無^ニ其儀^一候、事新敷申候事^ニ

候へ共、小齋之地^ニ令^ニ連馬^一候砌^ニも、数度被^レ及^ニ

合力^ニ候キ、于^レ今わすれかたく存斗^ニ候、

又者、天童^ニ手ヲふさかれ候折節、内々

自^レ是も可^レ及^ニ加勢^ニ存候へ共、未拙子代^ニハ

無^レ之候間、乍^レ存令^ニ延引^一候、乍^レ去、只今之

事者、御用^ニ候者、不断者共にてても、さし

こし申へく候間、年来骨肉之事と云、

於^ニ此度^ニも、無^ニ御隔意^一可^レ承候、恐々謹言

（天正十二）
六月十二日 政宗（花押）

山形殿

追而、

如^レ此之儀、

とく^ニも可^レ申候へ共、

（被損不明）
□□定之間、

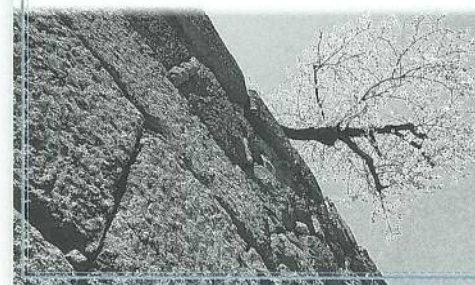
令^ニ遅々^一候、以上

古戦場めぐりに参加して

沼澤敬子

歴史のお話を聞き、年に一度は緑の地へ旅をするサークルがあるというお誘いを受け仲間に入れて戴き、楽しく故里の歴史を学んでおります。モガミヨシアキの名は耳にしているも「義光」の文字を読めない方が沢山いるように、これまで暮らしの中に歴史との係わりを深く考える機会も持たずに過しておりましたので、認識することで周囲が新鮮に興味深く感じられるようになりました。回を重ね学んでいくなかで、最上義光公の偉大さに触れ、戦国の乱世のなか民衆への思いやりが深く、家臣や領民から慕わ

れ、和歌や連歌をたしなみ、神社仏閣の護持に努めた最上家五十七万石の業績に遅ればせながら大変感動しています。平成十六年十月末に最上義光歴史館主催の「慶長出羽合戦 古戦場めぐり」に参加しました。定員を上回る参加申込みがあったと伺いました。コースは上杉軍が中山城方面から攻めてきた上山市赤坂にある大将塚からです。片桐講師の解説は、今にも山の頂きからほら貝が響き、二手に分れた火付け部隊が襲ってくるような弁舌に引き込まれました。上杉軍の大將穂村造酒が討ち取られた塚が、もつてのほかの菊薫る杉木立の中に閑かにありました。パスは、上杉家の苦



短歌
義姫は平和の女神
山形県歌人クラブ理事
歌誌「山麓」編集者
池内 安彦

霞城公園と呼びて市民は親しめる山形城の復元またるる
義光の妹義姫は政宗の母よ城跡を巡り往時を偲ぶ
南館に義姫栖みし時代ありと地域のわれら今に言い継ぐ
義姫は平和の女神ぞという講演に地区民われらの拍手は止まず
義光公銅像の指揮棒の差し示す西南西に街の開け来

提所である春日山林泉寺へ伺いました。慶長合戦で上杉軍の大將であった直江兼統夫妻や姫君達の眠る墓に参詣しました。穴のあいた珍しい墓石は、戦いの時に穴に棒を通し、かついで移動が出来る万年堂と呼ばれるものでした。長井市内で昼食後、直江軍が本陣とした荒砥の八乙女八幡神社に伺いました。小高い丘に登ると参道に、支えられながらも堂々と樹令五百年のエドヒガン桜の原木がいにしえののロマンを語りかけてくれるようでした。美しい紅葉の林道をぬけ、勇将畑谷城主江口五兵衛公が眠る長松寺へ着きました。寺の裏の高台からは、畑谷城址を望み、新しい五輪塔は江口公縁の方々が四百回忌にあたり、平成十一年に建立された事が墓碑に刻まれておりました。畑谷城で二日間足止めされた直江軍は、本沢の長谷堂城へと進みます。いよいよ合戦めぐりの最終地です。長谷堂の城山を正面にしながら麓に広がる田んぼが合戦場となり、上杉軍は、関ヶ原の合戦で石田軍が敗北した報せに退却していきます。半月にわたる長期戦は伊達の援軍も加わり最上軍は優勢に勝利したということでした。今回、慶長合戦の一部のルートに立てた感動は、いつの日か孫達と城山に登り伝えたく思います。大変有意義な一日となり感謝します。私の母は、今年米寿を迎えます。子供の頃の里を訪ねると、ちよんまげを結った祖父が着物姿で迎えてくれました。

最近になって祖父が天童市上貫津にある格知学舎で、長谷堂出身の本沢竹雲先生の門下生として学んだ事に辿りつき疑問が解けました。母は、小学生の頃に、祖父が授業参観に来るのが恥ずかしかった事、朝夕欠かさず正座して読経し、又反欧精神を貫きタオルでなく手ぬぐいを用い、不殺生から蚤や蚊も逃がしてやった事等祖父を偲び昔の話をしてくれれます。私の三才になる孫娘が一才の弟に大きな声で「オドゴシナガンニヤエ」「ウン」、公園で遊んでいた孫達の会話に、不意の驚きと、四世代同居に伝わるおぼんちゃんからひ孫達への日頃の贈り物を感じる思いが致しました。



長松寺(江口五兵衛光清の墓所)

旅に出ると、ごく自然に古城へと足が向きます。昔むした岩はだから、育かれた歴史が伝わってくるからでしょう。か。名もない草花のささやきにも耳を傾け、旅の楽しみをより一層深めてみたいと思います。(大森・主婦)

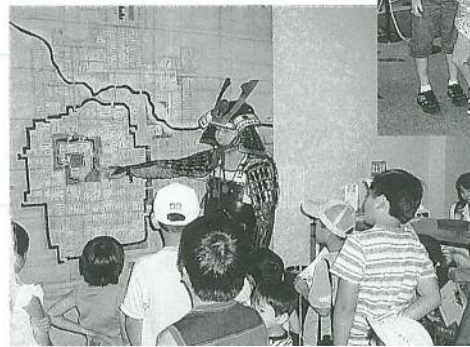
平成16年度
事業スナップ



企画展「よみがえる赤羽刀」～郷土の刀工～



特別展「江戸時代の山形」～歴代の城主たち～



映画上映会(鎧武者と歴史を勉強する)



平成16年度事業

◆企画展 《4月6日～6月13日》

「よみがえる赤羽刀」～郷土の刀工～
展示総数14口(うち赤羽刀12口)
ギャラリートーク 5月4日・5日 布施幸一先生

◆こども講座 《7月30日》

「山形城の二の丸を探る」
二の丸のオリエンテーリングを楽しもう！
最上義光歴史館↓山形城二の丸(東大手門)↓最上義光騎馬像↓北門↓本丸一文字門復元現場↓山形市郷土館)
↓光禅寺↓専称寺↓最上義光歴史館

◆映画上映会 《7月31日》

最上義光歴史館・山形国際ドキュメンタリー映画祭実行委員会主催
「映画『クレヨンしんちゃん嵐を呼ぶあつぱれ！戦国大合戦』
イン最上義光歴史館」
※二〇〇二年文化庁メディア芸術祭アニメーション部門大賞受賞作品

◆特別展 《9月18日～10月17日》

「江戸時代の山形」～歴代の城主たち～
展示総数85点(指定文化財3件)

◆歴史講座(史跡めぐり) 《10月29日》

「慶長出羽合戦「古戦場めぐり」」
最上義光歴史館↓上山(大将塚)↓米沢(林泉寺)↓荒砥(八乙女八幡神社)↓畑谷(城跡・長松寺)↓長谷堂(清源寺)
講師/片桐繁雄先生

◆日本刀講座 《2月12日・19日・26日・3月5日・12日》

「初心者のための日本刀講座」 講師/布施幸一先生
2月12日「日本の歴史1」
19日「日本の歴史2」
26日「郷土の刀工」
3月5日「取扱いと鑑賞の手引き」
12日「武将と名刀」

◆古文書講座 《2月13日・20日・27日・3月6日・13日》

「最上義光文書を読む」 講師/武田喜八郎先生

研究余滴⑤ 中野義時は実在したか？

長谷勤三郎

史実を確定するためには、信ずべき史料に拠らねばならないことは当たり前前の真ん中だが、最上家の歴史ではしばしばこの当たり前が忘れ去られる。典型的な事例が兄・義光による「弟・義時討滅事件」である。

『山形市史』『山形県史』を参考に概略を述べれば、次のような事件だとされる。

二人の父・義守は、兄を嫌い弟を偏愛した。義守は家督をだれにするかで迷ったが、結局は兄を山形城主に、弟を中野城主とした。弟は不満で兄を調伏しようとした。これが暴露して義光の怒りを買ひ、その攻撃を受けて天正三年（一五七五）に滅した。

これを皮切りに、義光は「残忍とも言える態度で」つぎつぎに一族を攻め滅ぼし、領地拡大に突き進むこととなった……というのである。

ところが、この「はなし」には、史料がないのである。

『最上記』『奥羽永慶軍記』など、私

かれていない。これら稗史類は面白く作る傾向があるもので、もし事件が風説としてでも存在したのなら、必ず取り上げられるだろう。十四本全部が取り上げないのは、風説さえなかったことの証拠だといつてよいだろう。

また十六世紀後期の史料として重視される伊達・上杉の文書や、『治家記録』のような編纂物にも「義時」の名は只の一回も出てこない。

参考に系図十二本を点検したが、「義時」を掲げたのはわずかに菊池蛮岳旧蔵本だけ。

要するに、十六世紀とそれ以後二世紀の文献史料によつては、「義時」の存在が確認できないのだ。その名が初めて現われるのは、仙台市青葉城資料展示館の大澤慶尋氏指摘のとおり、十八世紀末に編纂された『稽補出羽国風土略記』らしい。

たつた一つの、年代も遙かに離れた文書を拠る所に、義光による中野攻撃を確定的史実であるかのように公史が取り上げるのは、はたしていかなものだろう。他県の歴史書までが「義時事件」を取り上げ、義光の人間性を云々している現況を見るにつけても、歴史研究の基本を忘れてはならないと自戒するところである。

平成17年度事業

■展示事業

- (1)企画展
「よみがえる赤羽刀」赤羽刀と収蔵刀剣
(4月5日～6月12日)
平成11年に山形市が国より譲与された赤羽刀(GHQ)接収刀剣類を広く一般に公開するとともに、山形市が計画的に研磨整備を行なっている成果を紹介する。

(2)企画展

- 仮称「発掘された山形城」
(9月中旬～11月中旬)
山形市教育委員会が行なっている埋蔵文化財の発掘調査に関わり、山形城発掘の成果を広く一般に公開する。

■歴史講座

- (1)古文書講座
(1月～3月頃)
最上家に関係する古文書や古記録等を教材として、手紙の形式や時代背景、古文書の基礎解説等を学習する。

(2)刀剣講座

- (1月～3月頃)
日本刀の歴史や鑑賞の基礎的知識、日本刀の構造や取り扱いなどを学習する。

(3)史跡めぐり

- (10月頃)
山形県内を中心に最上家や郷土の歴史に関する史跡・名勝・関係施設等の現地研修を行なう。

■こども講座

- (1)夏休み学習会
(7月下旬)
小中学生を対象に、山形市周辺で最上家や郷土の歴史に関わる史跡・名勝・関係施設等の現地研修を行なう。

(2)親子の夏休み歴史研究会(夏休み自由研究相談会)

- (7月下旬、8月初旬)
親子で参加して、最上義光や最上家、郷土史等のテーマについて学習し、夏休み自由研究の相談会を行う。

■その他の事業

- (1)映画上映会
(1月～3月頃)
山形国際ドキュメンタリー映画祭実行委員会と連携して、歴史館を会場に歴史や文化に関わるドキュメンタリー映画や時代劇等を上映する。

※詳細につきましては最上義光歴史館にお問い合わせください。

【表紙の資料】

「御国替絵巻」

山田音羽子筆
山田秀穂氏蔵

山形城主秋元氏の家臣山田秀信の妻山田音羽子（一七九五～一八七七）によって記された日記・紀行文で、秋元氏が弘化二年（一八四五）に山形から館林（群馬県）へ国替えになったとき、約八十里（三二〇キロ）の道中旅行の様子を絵と文章によって記録したものである。文章は感受性豊かで女性らしい繊細さをもち、詩情あふれる名文。挿し絵は構図から風景・人物の描写まで素人とは思えないほどの上手である。女性による国替絵巻は他に類を見ない貴重な資料。
（写真は上巻「山形城」小荷駄町口より大町へ出る部分）

ご利用について

- 開館時間 午前9時から午後4時30分
入館料 一般 大人300円 高校生200円
小・中学生100円（土曜日は無料）
団体（20名以上）大人240円
高校生160円 小・中学生80円
月曜日（国民の祝日となる場合はその翌日）
12月29日から1月3日
JR山形駅より徒歩約10分
大手町バス停留所より徒歩1分



平成17年3月発行
編集発行 財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒9901004-6
山形市大手町1-153

印刷
023-6225-1710
023-6225-1710
023-6225-1710
田宮印刷株式会社